海外稲門会の躍動

Overseas TOMONKAI

台北稲門会

Taipei

会員からのメッセージ

台湾の厳しいビジネス環境のなか、公私ともに充実した日々を送ることができているのは、個性あふれる台北稲門会諸先輩に囲まれ、温かいご指導を受けているからこそと考えています。この母校の集まりが充実している要因の一つにライバル校の存在があると思います。卒業してもライバル校と切磋琢磨できる喜びは早稲田ならではといえるでしょう。卒業生に活力を与えていただくためにも、「さすが早稲田」と言われるようなSolutionを生み出す教育・指導を行っていただき、文武それぞれで学生が活躍する明るいニュースが台湾に届くことを切に望んでいます。

渡辺俊昌（1986年教育）

台湾ゴルフ早慶戦

2008年から2年半、台北に大学院留学をし、その後社会人経験を経て、13年から医学の勉強のため台中に来ています。難解な医学書、膨大な範囲の試験に悪戦苦闘の連続ですが、クラスメートに助けられ、感謝感謝の日々です。台湾の魅力は、人の温かさ、優しさだとつくづく思います。08年からお世話になっている台北稲門会は学生も気軽に参加でき、会員の皆さまは人生の先輩として親身に接してくださり、私には台湾の家族のような存在です。先輩たちに恩返しができるよう、一日も早く一人前の医師になりたいと思っています。

伊藤 功（2008年法学）

学部時代の短期留学がきっかけとなり、台湾が大好きになりました。学部卒業後に渡台し、今は現地の大学院で通訳・翻訳を学んでいます。稲門会の皆さんは世界を向いて仕事をされています。とてもエネルギッシュで、プライベートもお仕事もとにかく真剣勝負！です。そんな素敵な姿を拝見するたび、「自分ももっと頑張ろう！」と勇気づけられています。早稲田の皆さんとの出会いに感謝です。

熊谷つぐみ（2011年人科）

2014年の7月に家族で台湾に赴任し、もうすぐ1年になります。台湾の夏はとても暑いですが、それ以上に台湾の人たちの日本への愛が熱いと感じる毎日です。先日、レストランでメニューがわからず困っていると、その店の店員さんが隣のコンビニに駆け込んで、日本語のわかる人を連れてきてくれました。年配の方は「昔学校で習った日本語が使えるのがうれしい」と笑顔で話しかけてくれます。なんとかその熱い気持ちに応えたい！と思い、学生時代以来の中国語学習を頑張っています。

鶴羽大志（2004年政経）

1　2

1.ダブルハート。澎湖の伝統的な漁場の仕掛け
2.竹圍魚市場。新鮮な魚を味わえる

台北稲門会について

校友会の皆さま、こんにちは。

台北稲門会は1983年、某日系企業の支店長が社内後輩に指示し、7名の有志で発足しました。現在は台北を中心に約100名の日本人校友が在籍しています。その顔ぶれは長く住み着いている方、業務駐在、留学生が中心ですが、日本から行事に参加される方もいて、バラエティーに富んだアットホームな会です。主な活動は親睦会である「稲子会（いなこ）」、ゴルフコンペの「稲友杯（とうゆう）」、そして年2回の「台湾ゴルフ早慶戦」でライバルである慶應としのぎを削っています。

台湾には台湾人で組織する早稲田大学台湾校友会（陳光敏会長、会員数約470名）があり、お互いの行事に参加しあうことで、日本人・台湾人の垣根のない一体となった活動を行っています。日本で今年上映された台湾映画『ＫＡＮＯ』では、戦前の高校野球を通じた日台の絆が描かれましたが、現在でもこうした台湾での日台校友の親睦によって、その絆が時を経てさらに深まっているものと実感しています。

2014年の日台間の相互往来者数は約460万人、日台貿易総額は約616億米ドル、日台投資総額は約12億2,733万米ドルと、日台間の経済貿易と観光交流は年々増えています。

台湾在住の校友の皆さまの力で、日台間の経済、貿易、相互往来がますます盛んになること、そして台湾と早稲田の絆を深めるため、日本をはじめとする世界各地の校友の皆さまが台湾にいらっしゃることを願っております。

会長 島 一範（1982年政経）

懇親会の模様

台湾の魅力

台湾は九州ほどの面積ながら多彩な顔をもっています。終戦まで50年にわたる日本統治時代の残り香に、対岸の中国大陸から流入した中華文化が混ざり合った上、客家（はっか）や原住民の文化が加わり、台湾文化の多様性を生み出しています。移民を先祖にもつ人々が多いためか、よそ者である外国人に対しても非常に寛容な態度で接してくれます。

そのなかでもとくに日本に対する感情は特別なものがあるといえます。「世界一の親日」といわれるのもだてではなく、2011年の東日本大震災に際し、赤十字を通じただけでも200億円を超える義援金が寄せられたように、物心両面で温かい手を差し伸べてくれた台湾のことを覚えている方も少なくないでしょう。

とはいえ、それまでは台湾のことをよく知る日本人は決して大多数ではありませんでした。そうした意味では、震災は不幸な出来事でしたが、台湾という隣の地域の存在を再認識するきっかけになったのではないかと思います。

今や日本では多くの台湾関連本が出版され、雑誌でも台湾の特集が多く見られるようになったと聞きます。街にあふれる日本人観光客の姿を見るにつけ、新しい日台関係の幕開けを期待しているところです。

長田光生（1991年理工）

in Taiwan